



誹諧正辭通

5
1590



利
1.590
卷

釋里

先師有誹諧番匠童暨小頭二書燒
失矣欲再合刻之所考其辭頗正且
法故夏名正辭通 楚芹子題

同
同

正辭通目錄

正辭通目錄

付句心ほのり
意の句のり
奇伝のり
源片のり
千句のり
和漢の事
同字別号のり

速懐の句れり

西八句并百韻の法

尺十尺のり

首底のり

終句切字のり

句教并古娘の事

花の句終る娘のり

治
四
永
目
七

恋の詞 は 恋の白ゆり やうのゆり

沖波の詞

歌敷のゆり

古懐の詞

哀傷の詞

人偏 并 北人偏 古 詞

吾和 并 北人偏 古 詞

山類 右 詞

水色 右 詞

夜台詞

四季詞

弟本 又 名

○ 付句 心 始の事

古流 中 比 古流の付 中 比 心 始の事 心 始の事 心 始の事

こけり 心 始の事 心 始の事 心 始の事

あひ 心 始の事 心 始の事 心 始の事

付句 心 始の事 心 始の事 心 始の事

是古流の付 中 比 心 始の事 心 始の事 心 始の事

こけり 心 始の事 心 始の事 心 始の事

是も茶の言やして付れぬも茶の味はかて秋の露
ちるものおねの味は情のけいしん又はの氣は甘とんか
昔まをさしこらん煙がらへくと
是縁締やして借あど其家はつれいあつてあつて

大橋と小橋のちいひきあつて

是も氣はつてはよまた徳田のせとてあつて其家は
さしあふと又切あつて付れぬ

文科の目もつて家はねとら

是は文科の目もあつたは家もあらんあつてあつて馬
持の家もつてあつたあつてあつてあつてあつて
右は縁もつてつれいあつてあつてあつてあつてあつて
も付あつてあつてあつてあつてあつてあつてあつて
とあつてあつてあつてあつてあつてあつてあつて
定り付合のたつてあつてあつてあつてあつてあつて
締あつてもつてあつてあつてあつてあつてあつてあつて

○又ま懐乃茶まをさしこらん煙がらへくと

姫^ハ推^サ川^{カハ}に^ニ流^ハる^ル流^ハる^ル人^ニ
老^{カイ}ふ^ル人^ノも^カぞ^ウか^クる^ル人^ニ
人^ノも^カぞ^ウか^クる^ル人^ニ出^デて

是^レ亦^モ百^ノ皆^ノ連^レ様^ノの^{本^ノ意^ヲ}は^ハり^{又^モ}連^レ様^ノの^{本^ノ意^ヲ}の^{句^ハ}
と^しび^ぶと^{人^ノも^カぞ^ウか^クる^ル人^ニ}
乃^レれ^ぬる^{人^ノも^カぞ^ウか^クる^ル人^ニ}
余^ハ亦^モお^もふ^ル人^ノも^カぞ^ウか^クる^ル人^ニ
ち^とお^もふ^ル人^ノも^カぞ^ウか^クる^ル人^ニ

か^あら^ばと^云は^らる^る事^ハの^ハら^ばと^云は^らる^る

我^ハも^カぞ^ウか^クる^ル人^ニ

お^もふ^ル人^ノも^カぞ^ウか^クる^ル人^ニ

是^レ亦^モの^{句^ハ}を^{皆^ノ}連^レ様^ノの^{本^ノ意^ヲ}は^ハり^{又^モ}連^レ様^ノの^{本^ノ意^ヲ}の^{句^ハ}
と^しび^ぶと^{人^ノも^カぞ^ウか^クる^ル人^ニ}
い^ふ種^ノの^{句^ハ}を^{皆^ノ}連^レ様^ノの^{本^ノ意^ヲ}は^ハり^{又^モ}連^レ様^ノの^{本^ノ意^ヲ}の^{句^ハ}
亦^モお^もふ^ル人^ノも^カぞ^ウか^クる^ル人^ニ

○ 西^ノ八^ノ句^ハ并^ニ百^ノ韻^ノの^{法^ハ}

變むのり昔を勢がわしひ子孫に遺りてはるるを世とせり
今と氣をよそとせし人附白とあるとむらに合しり梓
あつー一むれ内をよそとせし氣をあつる當流の勢白と

氣をあつる勢白

白妙やうとけえんもあゆまの名人 一目明

埃之をよそとせし山色うそ

池の魚乃様お申氣流うね 伝徳

霞より時々向まゐる帆のけり 新黒

手紙とある勢白

如泉 如泉 如泉 如泉

和及 和及 和及 和及

稲妻や二本まてむ小松原

蝶咲てむ形移む垣根子

有種おいておのほろ冷情おきし流る勢白

芭蕉 芭蕉 芭蕉 芭蕉

湖春 湖春 湖春 湖春

夜さけと鳴くも夜乃 鼓う那 才丸
 三吉晴ハ何さうともんこりさ 和及
 け歌と手名人のとすもさくやハ塔初をれらふこのむ
 舞うはなれ白まれの夜におの粹とをうけそよー
 脇 古流ハ連前のとく粹なる習ひの事元今風ハ大粹舞白
 系気おれと系気こくやらひてよー 事れ舞法さうぬやうお
 とくハ顔字なるさうぬーもかゝるハ習ひらして後きべー
 才三 てとりやもーお合はて事やうとらんぞりもやーどちおどめ

せのハせぬがうー四季の内脇とに回ー時節かして才三よー
 べーま事れ舞白習ひハ縁ハ月ツキの節分せぶんハ縁生やまひのむせ又二月お返
 物成ものなりとくー事ぬハ縁うらうちも果はたなるの縁ハ三月と月の物成
 及秋あきの月もさう多ー初対はつたいをいふとくハ二句けいもくおもへもあひま
 是古然こぜんの乃法也顔字かんにこのむの分ぶんここのまのしよまのむのむのむ
 初はつかのかうり井いれはせぬとせぬがうー只してよもいふよりのむが
 せぬものとをけいよる
 同書 左付すり白句め粹とをむらうとせぬ法ん対まのいふよーとよ

~~~~~  
~~~~~  
~~~~~  
~~~~~  
~~~~~

七句の 後句 徳分三ヶ月と 三ヶ月の定は 秋の月と 三ヶ月  
ハシケリノ 冬乃 月と 三ヶ月と 三ヶ月と 三ヶ月

八句の 七句の 三ヶ月と 三ヶ月と 三ヶ月と 三ヶ月と 三ヶ月と  
月と 三ヶ月と 三ヶ月と 三ヶ月と 三ヶ月と

面八句の 徳分三ヶ月と 三ヶ月の定は 秋の月と 三ヶ月  
三ヶ月と 三ヶ月と 三ヶ月と 三ヶ月と 三ヶ月と

名不 古人の名 古人の名 神祇も 古人の名 古人の名

神あり ありと 又 後句 神祇 又 教 又 名 又 名 又 名 又 名

裏十四句 十句目 三ヶ月の 句の 三ヶ月の 句の 三ヶ月の 句の

三ヶ月の 句の 三ヶ月の 句の 三ヶ月の 句の 三ヶ月の 句の

三ヶ月の 句の 三ヶ月の 句の 三ヶ月の 句の 三ヶ月の 句の

三ヶ月の 句の 三ヶ月の 句の 三ヶ月の 句の 三ヶ月の 句の

三ヶ月の 句の 三ヶ月の 句の 三ヶ月の 句の 三ヶ月の 句の

三ヶ月の 句の 三ヶ月の 句の 三ヶ月の 句の 三ヶ月の 句の



も一秋の月ハ定法なれども他の氣もそとらるるも一  
二の義十四句 初初のうちとれあ一

三の面義者十四句 二はうらおとてと同一事と

名法なほりの面十四句 このおとてとれあ一

名法の義八句 月ハせぬ七句め義の定法なり句ハ花

とて別して賞うらや就しゆの花と奉ほう句ととまき帯の阿あひさるは

目めあつとてやにさる句ハの花の句よりとまき帯はと一

○ 一初法の仕や

面六句 五句め月の定法と 義十一句 八句め月秋十一句め

花の定法 名法の面十二句 土句め月の定法 名法の義

六句 五句め義の定法なり阿あげ句雜まじとて面は月をなと一

一一人連寄小寄初の一人乃名法入て二十六句はまゝ例たとひ之細法

よとまき名法いれは数とて二十六句はとてなり

○ 四十四乃仕や

是と百韻の初初と名法の初と二初して二三の初り法はとて

またとて別小子細る一 百韻と同一法なり

○ 源氏此法

奇仙の初折の次へ面十二句 土句月句の定法 表十二句 八句月土句の定法  
此折古四句をよみて終ると折句数六十九句なり

○ 首尾の法

奇仙の面十二句名詠の表六句終ると十二句之法は奇仙と甲斐子細子  
○ 十句ハ後句数十句也口季分や

まの句三 夏の句二 秋の句三 冬の句二 終十句之又十句

やうう花一月中一ふと折表せんともると折は是もろ一

おみす、十句の時かひい者折片之しよ折表ありと傳ふま  
らむこらえはてもろ一のしぬと折れり

くまの 表頭の後句かひも終るるここの後句あまもこの也こ終るま

しる後句かひも終るるここの後句あまもこの也こ終るま

題 あまの 初十去 春 夏 秋 冬 梅 花の折一折表せん俗

らむる歌やどりのくまんしよし折あつはせぬし

○ 後句此切字の事

な かり くり あり ち ぞ ー ー ー







○ 正花やれりよおとすりさるる

花子の相云 灯の夜 夜お茶 繪北花 花やう

花火 花形 花敷 花のいらさ ちやれりさるる

こしれりさ 花からや

○ 正花より秋の花

花灯籠 花火 燈の花

○ 高き植物の之をまの正花

花のよこ 花お茶 花茶 花入 花瓶 立花

花の生 花草 花車 花の宴 花軍 花の雲

花の波 花籠 花の宿 花の雪 花團 花友

○ 正花よりさるる

花丁子 花野 草の花 花の夜 花の標 花の標

花のよこ 花の草 花の夜 花のつと 花の分

花のよこ 花の草 花の夜 花のつと 花の分

○ 花の洞

花の山 花の洞 花の洞 花の洞 花の洞















かゆまゝ。月のり。月夜乃友。のり。見。尼。何。釋。氏。冥。弘。絶。吉。聖。の。國。物。借。奏。者。即。木。子。子。の。老。死。太。史。そ。ら。た。た。り。武士。引。算。抄。記。抄。り。り。り。り。下。記。續。考。ゆ。い。雜。職。無。後。命。生。農。人。織。人。商。人。販。賣。人。雲。在。人。公。家。人。備。前。正。備。志。

北人備分

六親。人形。を。い。ほ。ん。か。ち。り。も。く。代。友。大。工。月。夜。友。花。夜。友。月。夜。友。夜。夜。の。り。酒。小。意。百姓。目代。大務。と。ご。ひ。あ。む。た。か。代。て。り。借。老。翁。お。り。あ。ら。り。公。家。歩。行。く。ん。ご。く。ま。り。あ。ら。り。以下。雜。兵。居所の分。家。門。宵。戸。壁。天井。覺。戸。葺。二階。や。り。

切。城。筑。地。橋。形。屋。形。書。院。度。局。疎。  
松。多。不。廊。下。探。干。湯。飯。風。号。庭。軒。垣。宿。  
窓。隣。庭。坪。の。ら。露。河。外。面。蓋。帳。た。り

山類の分

山。岑。嶽。岳。洞。岨。高。根。坂。谷。崎。岫。尾。と。蘇。  
嶺。炭。油。う。け。く。松。木。山。峯。山。坑。つ。ら。朽。た。り。  
の。岩。く。久。米。河。の。く。寫。土。法。石。激。川

北山類分

崎。溪。河。一。之。一。一。國。川。一。ら。の。川。一。と。と。と。  
山。科。の。岑。高。砂。松。吉。野。の。奥。小。崎。く。く。と。り。  
の。れ。く。と。り。か。れ。野。へ。木。と。崎。を。せ。崎。小。初。激。山。が。川。  
炭。燒。之。新。人。猿。汎。木。岩。檜。三。々。崎。ひ。む。ろ

水名乃分

海。浦。湊。崎。汀。崎。激。泉。濱。法。津。津。川

淡。堤。岸。池。沼。江。井。古井。新井。溝。池。  
 清。水。波。淡。湖。伽。こり。ひび。新。幾。浮。木。  
 浮。桶。流。流。蛙。魚。網。釣。瓶。下。極。釣。た。り。  
 海。士。帽。臺。草。藻。の。歌。負。和。布。の。歌。信。吉。の。神。  
 形。石。頂。二。三。崎。小。崎。香。崎。橋。崎。田。井。志。賀。の。松。  
 津。後。は。ら。月。の。お。し。り。難。波。津。三。日。崎。松。崎。  
 此。の。邊。多。  
 天。乃。く。比。橋。夏。の。浮。橋。横。川。三。岐。川。あ。ま。り。川。苗。

代。因。れ。り。ひ。難。波。も。志。賀。佐。吉。大。井。形。石。池。  
 畠。源。の。三。池。松。浦。崎。三。日。川。う。ま。白。川。の。雲。野。  
 朝。の。玉。ふ。月。の。あ。硯。の。あ。手。あ。布。き。り。室。持。池。  
 雲。の。海。洞。の。海。雲。の。海。松。屋。小。田。れ。り。を。り。若。

夜分北洞

られて。くれそそし。けけれ。明。か。の。明。く。三。日。川。の。  
 空。を。ぬ。か。る。春。あ。け。て。別。の。春。も。う。は。な。れ。り。

とき火。いさ火。かや火。あさ火。らさ火。床。  
 後や。ふまん。衾。枕。まぬく。下紐。うな。坂帳。  
 孫。まも孫。おと。いびき。む川。うさ孫。  
 又孫。そのお。まむし。まけむし。まむし。七夕。  
 かきま。ふくろ。まひ。いさ。日まら。のどろ。  
 かきま。孫。孫。孫

にき子の詞

正月 じつぎ。初き月。初空月。かき初月。ちき月  
初き月のま。まの空。日のま。まの初。まのま。  
 元日 初と。初き年。年改。聖き年。ま且。三元。  
改き。まのま。まのま。まのま。まのま。まのま。  
 屠蘇 日 白散 日 度瘴散 日 菓子  
屠蘇。日。白散。日。度瘴散。日。菓子。のまのま。  
 司奏。七曜の由曆。祇園のけつまうけの汁。寅時  
 門松。かぶり竹。かぶりま。かぶり炭。大うさ。















つゝ。かゝあひひ。一八。射干。菖菝。つゝのくま。  
 岩菝。おしりふ。桑引く。知のくま。菖菝。つゝのくま。  
 菖菝。菖菝のくま。つゝのくま。つゝのくま。つゝのくま。  
 友木立。木れし。雲。美人系。つゝのくま。つゝのくま。  
 てつゝのくま。つゝのくま。つゝのくま。つゝのくま。つゝのくま。  
 厚朴のくま。菖菝。つゝのくま。つゝのくま。つゝのくま。  
 たらん子。つゝのくま。つゝのくま。つゝのくま。つゝのくま。  
 根。つゝのくま。つゝのくま。つゝのくま。つゝのくま。つゝのくま。

つゝのくま。つゝのくま。つゝのくま。つゝのくま。つゝのくま。  
 五月。つゝのくま。つゝのくま。つゝのくま。つゝのくま。つゝのくま。  
 加者了。つゝのくま。つゝのくま。つゝのくま。つゝのくま。つゝのくま。  
 吉乃田。つゝのくま。つゝのくま。つゝのくま。つゝのくま。つゝのくま。  
 花つゝ。つゝのくま。つゝのくま。つゝのくま。つゝのくま。つゝのくま。

















糸天汁あり。豆うり。室船。ひしごいふり。  
 かこぶ葉紙のひしむ。小つらまら。若紙隣  
 若紙まら。若らうら。正月のち初。年まらら。  
 れをこめ。うづら。室をまら。室化酒。ふぐ汁。  
 茶倉。室をまら。年こめり。年忘。曆の末。  
 子梅。臘梅。吾宗竹

草木の異名 并川弁

かかえん草

正月九日餅のこよあくたこんこ

あむの草よんからから草やそ御酒の徳にん

初代草

正月二日大内おこめり

大内や百葉山乃初代草いゝ年入のあて梅らん

初ん草

まら

年上に緑のちも初ん草からいゝ年のあて梅らん

子代ん草

まら

神田の林蔵おらむりあやふ草種とて社に個物あり

あやふ草 せいし

恒吉や舞のあやふ草種もあやふ草とて遠く出

根白草 せり

せりは遊社あやふ草種は神田の寺とゆひし

あやふ草 様

あやふ草種はあやふ草種もあやふ草とて遠く出

あやふ草 様

種あやふ草種はあやふ草種もあやふ草とて遠く出

あやふ草 せいし

あやふ草種はあやふ草種もあやふ草とて遠く出

あやふ草 せいし

あやふ草種はあやふ草種もあやふ草とて遠く出

あやふ草 せいし

あやふ草種はあやふ草種もあやふ草とて遠く出

あやふ草 せいし



二季草のついでに草のついでに一日の草のついでに

草のついでに草のついでに

草のついでに草のついでに草のついでに

二季草のついでに

大内名もは草のついでに草のついでに

何の草のついでに

浪に草のついでに草のついでに

二季草のついでに

夏まきのついでに草のついでに二季草のついでに

二季草のついでに

何のついでに草のついでに二季草のついでに

二季草のついでに

のついでに草のついでに二季草のついでに

二季草のついでに

草のついでに草のついでに二季草のついでに

二季草のついでに

山祿草折て山邊にゆるとる葉をこぼしてはたきぬ

初ん草 卯の辰

初ん草ゆつゝあつたてしむるに卯の辰甲乙の辰

青見草 同

おとろしん紙袖ぬれし青と草をよむ社音にみしてあは

垣ん草 同

時をさくやふきし垣ん草はあつたてしむるに卯の辰

形ん草 同

形ん草をよむとやうにん石のまの辰の辰は流石ゆき

鳥吉草 杜若

交響のまの辰の辰はあつたてしむるに卯の辰

雲ん草 あつたてしむるに卯の辰

山遠くわたりたる雲をよむとやうに卯の辰

庭古草 橋

橋は昔の家のまの辰の辰はあつたてしむるに卯の辰

秋結草 友田

あけて秋の葉れよあぐにまゝにありてはしん

あけ草 夏田

とく棟へ糸田れ面を秋さらしてあけ草と名をいふ

池の草 くらら

新つとる草のふもく池の草のふもく

あけ草 草のふもく

あけ草のふもくあけ草のふもく

あけ草 句

あけ草のふもくあけ草のふもく

あけ草 句

あけ草のふもくあけ草のふもく

あけ草 句

あけ草のふもくあけ草のふもく

あけ草 句

あけ草のふもくあけ草のふもく

あけ草 句

友の心をおもひにたしむるは  
火信草 やうやくしひまゝらけり

秋の夜にせのほの火の草の  
不可見草 かへん

名汁の味でもやのちの草を  
名草 なぐさ 同 二品まき草の  
てるる草

打人の心を うぢのこころ  
世草 よ草

いづれの世のつらさを  
秋草 あきぐさ 大豆 ぬきもつり

ひらねの草 ひらねぐさ  
秋草 あきぐさ

まじりの草 まじりぐさ  
秋草 あきぐさ

子刈草 こりぐさ  
秋草 あきぐさ

あまのついでにたれをれはら茶のついでに種も月や出さ

風有茶の扇

とらねまはあつゝ人ゆき茶々へおえる也園の月くら

切又茶の萩

このやうな名も切茶のついでに種も月や出さ

色又茶の白

色又茶のついでに種も月や出さ

色又茶の白

色又茶のついでに種も月や出さ

色又茶の白

色又茶のついでに種も月や出さ

色又茶の白

色又茶のついでに種も月や出さ

色又茶の白

色又茶のついでに種も月や出さ

色又茶の白

四方の門のしるしを釣籠の如く葉ももろくつらつら子  
久陰草 あさく白

名もくさの葉の縁をくさく久陰草中を少許の白  
ふ草 女中草

誰かあつさく時くあつさく草の縁をくさくくさく  
飛入草 せく

名もくさくもくさく草の縁をくさくくさく  
百枝草 白

名もくさくくさく草の縁をくさくくさく  
あつ草 くさく

誰もあつ草の縁をくさくくさく  
河草 竹の草

秋のくさくくさく草の縁をくさくくさく  
夕草 白

月におくくさく草の縁をくさくくさく  
あつ草 菊

時を知らぬわが心は草花の如く  
枯る草 冬草の如く

春の如くは花の如く  
初雪草 冬草梅

万世の如くは花の如く  
親子草 春草

年毎の如くは花の如く  
六花 雪

花の如くは花の如く  
雑の如く 冬草心

花の如くは花の如く  
星の如く 心

花の如くは花の如く  
朝の如く 心

花の如くは花の如く  
朝の如く 心

おと草花もくらしんてんてんてんてんてんてんてんてんてんてん

物ん草心

おと草花もくらしんてんてんてんてんてんてんてんてんてんてん

縁草心

おと草花もくらしんてんてんてんてんてんてんてんてんてんてん

恋草心

おと草花もくらしんてんてんてんてんてんてんてんてんてんてん

同草心

附録

おと草花もくらしんてんてんてんてんてんてんてんてんてんてん

おと草花もくらしんてんてんてんてんてんてんてんてんてんてん

おと草花もくらしんてんてんてんてんてんてんてんてんてんてん

おと草花もくらしんてんてんてんてんてんてんてんてんてんてん

おと草花もくらしんてんてんてんてんてんてんてんてんてんてん

おと草花もくらしんてんてんてんてんてんてんてんてんてんてん

おと草花もくらしんてんてんてんてんてんてんてんてんてんてん

おと草花もくらしんてんてんてんてんてんてんてんてんてんてん

おと草花もくらしんてんてんてんてんてんてんてんてんてんてん



録す一冊の始り終りひかへてはあつたなり

誂諧正辭通終

寶曆十一年辛巳歲九月既望

京都建仁寺町

加賀屋外兵衛

江戸堀江町二丁目

丹波屋理兵衛

大坂心齋橋南結

丹波屋半兵衛

板行

書林



Handwritten text on a heavily worn, aged, yellowish-brown paper cover. The text is written in dark ink and is mostly illegible due to fading and damage. The visible fragments include:

Top right: 24

Top center: 1803

Center: ... ..

Bottom center: ... ..

Bottom right: ... ..